

# 自由遊びから協同遊びへ 環境・援助を考える

## 一段ボール遊び―

茶座 伊都子・田中 悠<sup>\*</sup>

### 1. はじめに

学習指導要領の基本理念『生きる力』の基盤を培うべき幼稚園の時期には、基本的生活習慣・良いこと悪いことを判断する力・思いやりの心・ルールを守る力・知的好奇心・創造的な思考力などの豊かな心と力を多様な体験を通して育てていきたい。つまりそれらの心と力が育つ体験そのものを研究・精選していくことが保育者としての日々の課題であり、それらの心と力が育ってきていると見極められる目を持ちたいと思う。その課題にむけ、遊びや活動においての子どもの姿、その変容ぶりが充実した姿につながるよう、そのための環境と援助を考えるというテーマで具体的に研究したい。

現代社会において、子どもが子どもらしく遊び、生活するための“仲間”、“時間”、“空間”が失われてきている。少子化により、子どもがかかわる仲間が失われ、親が子どもの生活を管理する傾向が高まってきて、情報化の進展によって人と人との直接にかかわる機会が軽視されてきている。近年、多く生じているいじめや学級崩壊、人とのかかわりで感情のコントロールができない傾向、失敗や葛藤に傷つきやすい傾向など、人とかかわる力の育ちの問題は、こうした社会のありようを反映したものと考えられる。

このような状況のなか、人との豊かなかかわりを提供する幼児教育の役割があらためて注目されてきている。幼児期は、からだ全体で他者とかかわり、楽しさやうれしさ、怒りや悲しみなど豊かな感情体験を重ねていく時期なので、この時期にどのような人とのかかわりを経験するかは、後の人間関係の発達において非常に重要である。そのため、この研究では協同的遊び

というテーマで研究を進めていきたい。

協同的な遊びの協同とは「力や心を合わせて助け合って事を行うこと」というような解釈ができる。しかしここでは 幼児の発達段階をふまえ、協同的な遊びから育つものを「心を合わす」「助け合う」という育ちに限定せず、友だちとのかかわりから得られてくる育ちを全般と捉えたい。この育ちが芽生えるよう協同的遊びの環境・援助を考えていく上で、子どもたち一人一人の自由性も大事にしていきたい。保育者が決めた遊びで無理やりかかわり合いを持たせるのではなく、子ども自身が自ら選択した遊びの中で、自ら友だちにかかわりたいと思えることが本当の意味での『協同』につながってくる。その上でそれらの育ちが効果的に得られる遊び、及び遊ばせ方などを環境や援助の面から考え、遊びを協同へと発展していける要因となるものを探していきたい。

### 2. 目的

遊びを協同へと発展させていく要因となるものを探ることができれば、保育や遊びを進める上で保育者がその要因を理解しておくことで、遊びが充実し子ども同士のかかわり合いも生まれてくるであろう。協同的な遊びを経験することで純粋に仲間と遊ぶ楽しさ、面白さを感じてもらいたい。そして今後の人間関係を広め、深めていける子に育ってほしい。

### 3. 方法・分析

保育の中で一つの遊びに焦点を当て、遊び始めから遊びが発展し遊び込む経過を見ながら考察していきたい。ダンボールという視覚的にも興味をそそり、体全体で思い切り遊べる素材を用いて遊びを進めたい。

<sup>\*</sup> 東海第一幼稚園教諭

## 『ダンボールを用いた協同的遊び』

～ “自由” からの “協同” ～

H20.12～

東海第一幼稚園 5歳児 さくら2組  
(男児11名、女児9名 計20名)

1) はじめに

段ボールを使った遊びとして、以前クラス全員で「基地作り」というテーマを決め基地を作り、その中に入りごっこ遊びを体験した。クラスで一つの物を作ることで、クラスの仲間との空間ができ、仲間意識を高めることができた。

しかし皆で一つの物を作ることで、一人ひとりの役割や作る物が少なくなってしまう、子どもたちの意欲が強い割に、一人ひとりの力を十分に発揮することができないという問題点があった。

作品展を通して子どもたちは少人数でまとまり、皆で意見を出し合いながら一つの物を作ることができるようになってきた。

そのため、同じ遊びをしたい子どもたちが少人数のグループになり自由に遊びを進めていく活動を考えてみた。

2) 実践

《自由遊び》

大量のダンボールを保育室に置く。

- A. ダンボールの中に入って、キャタピラー遊び
- B. ダンボールの中に入って、お風呂遊び
- C. ダンボールを切り開いて組み合わせての、秘密基地作り
- D. ダンボールを切り開いて組み合わせての、お店屋さんごっこ
- E. ダンボールを切り開いて組み合わせての、飛行機作り
- F. 皆の様子を見ている

《遊びの発展》

- ★Aの子どもたちは継続した遊びができず、ダンボールに触れながら模索している。  
Cの子どもは一人で秘密基地を作るがダンボールを支える手が足りず、何度もダンボールが倒れてしまう。



Aの模索している子の存在に気付かせ、誘ってみよう助言する。



Cの子どもは、Aの子どもたちの好きな忍者を取り入れた『忍者の秘密基地』を男児3人で作り始める。

- ★Fの子どもたちは皆の様子を見ているだけで、思い切ってダンボールに触れることができない。

Fの女児2人の頭からダンボールをかぶせてみる。



ダンボールをかぶせたことでお互いの距離が近くなった2人は、顔を見合わせ喜ぶ様子を見せ、2人で色々な場所へ動いているうちに『車ごっこ』が始まる。

- ★Bのダンボールのお風呂に入りのんびりしていた男児が自分のダンボールを、Eの飛行機を作っている男児の集団の中を持って行き、Eの集団の中でまたダンボールの中に入ることを楽しむ。  
それを見たEの男児が「お風呂があるからみ

んなが泊まりに来れるホテルにしたら？」と提案し、飛行機を作りたい子たちとホテルを作りたい子たちに分かれる。

どうしたらお互いの気持ちを一つにして作ることができるか一緒に考える。



作りたいものを別々に作るのではなく、皆が納得するまで話し合い、二つの意見を合わせた『飛行機ホテル』を作り始める。

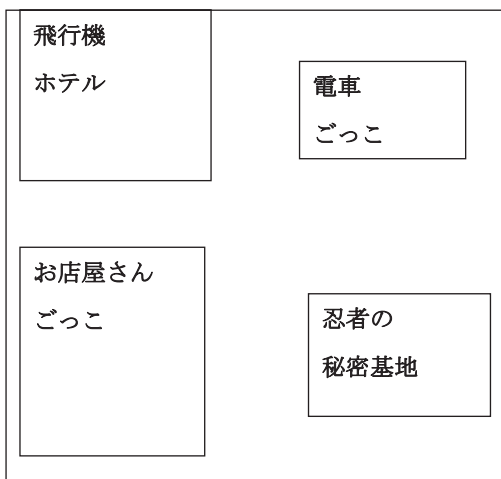
- ★『車ごっこ』をしているところに、「入れてほしい。」と女兒が声を掛ける。ダンボールは二人でちょうど大きさであったため、三人乗ることでダンボールが破れて、車が壊れてしまった。

もう一つ切り開いたダンボールを置いておく。



「大きくしてみんなが乗れる電車にしようよ！」と二つのダンボールをつなげ、大きな枠にし、『電車ごっこ』に発展する。

# 【保育室】 環境構成



《仲間とのかかわりによる遊びの発展》

- ★Dの『お店屋さんごっこ』でお店を作る女兒たちは、お店の壁が何度も倒れてしまい困っている。

「大工さんがいればいいのにね。」と声を掛ける。



『飛行機ホテル』を作る男児に店の壁作りを手伝ってもらうよう頼み、男女が協力して作るようになる。



これをきっかけに『飛行機ホテル』と『お店屋さんごっこ』の間を子どもたちが行き来することが多くなり、お互いの遊び場をつなげようという声があがる。

- ★『電車ごっこ』をして遊ぶ子たちは、廊下に出たり、皆の遊び場を回り楽しむ中で、『忍者の秘密基地』を作っている男児が段ボールの小さな切れ端を“招待状”と称して『電車ごっこ』をする女兒に渡す。

それぞれの遊び場をつなげ、段ボール遊びをクラスで一つの遊びにまとめるきっかけになると思い、遊びを一度中断し、“招待状”を渡すかかわりを皆に紹介する。



皆が刺激を受け、自分の遊び場に仲間を招待したい！と『招待状作り』が始まる。

- ★全てのグループが招待状を作り配り合うが、遊び場作りがストップしてしまう。

どうしたらお客さんが来た時に喜んでもらえるか尋ねる。



- ・『飛行機ホテル』は皆で“大きい旗”を作る。
- ・『お店屋さんごっこ』は廃材を使って“品物”

を作る。

- ・『忍者の秘密基地』は手裏剣の的当てを作る。
- ・『電車ごっこ』は電車にきれいな飾りをつける。

- ★『お店屋さんごっこ』で遊ぶ女兒が「ここは森のお店屋さんよ！」と皆に伝えている。

“森”という一つの空間を広めようと、遊びの終わりに女兒の姿を紹介する。



全てのグループが『森の飛行機ホテル』、『森のお店屋さん』、『森の秘密基地』、『森を走る電車』と呼ぶ。



保育室を森に見立て、『さくら2くみの森』と呼び始める。

- ★クラス皆で『さくら2くみの森』で遊ぶ。招待状を交換し合い遊び場を共有する。

- ・遊びの中で、手裏剣の的当てを楽しくするために、皆のアイデアで点数を付ける。
  - ・飛行機ホテルで寝泊まりしたり、お店屋さんにはほしい品物をリクエストして遊ぶ。
  - ・遊び場を移動するときは電車を利用し、招待状のかわりに切符を作って渡している。
- 仲間と大きな一つの空間で、協同的に遊びを發展させながら楽しんで遊ぶ。

### 3) 分析

遊びに対する意欲と探究心を高める「自由性」を大事に遊びを進めていった結果、最後まで楽しんで遊びに取り組むことができた。自由遊びから始めたことにより一人ひとりが生き生きと遊びを進めて行くことができ、遊びの終わりにそれぞれの子やグループがどんなことをして遊んでいたか、どのようなかわり合いや發展が見られたか、保育者が皆に紹介することで、次の遊びへの意欲や他の遊びや仲間への興味を高めていくことができた。保育者の援助によりかわり合いが持てそうな場面を見極め、声を掛

けることで遊びが發展していく様子や、かわり合いを紹介することで仲間へのかわり合い方を子どもが自分なりに考え仲間に働きかける様子など見られ、子どもたちが意欲的に仲間と遊びを深めていった。遊びを進める中で一人ひとりが課題を持って取り組むことができ、次第にグループで同じ課題を持つようになり、最終的にはクラスで一つの課題(さくら2くみの森)に向かって協同的に遊びを進めて行けた。「自由性」を大事にするからといって放任することなく、保育者が柔軟な「計画性」(どのように遊びをまとめていけるだろうかという考え)を持ち、子どもの気持ちに合わせた「方向性」(子どもたちが何をしたいのか、何を作りたいのか)を毎回示すことで、課題を一つに協同的に取り組むことができると考える。では自由遊びから協同的な遊びへと發展させていくために「自由性」「計画性」「方向性」以外にどんな要因が必要であるか研究を続けていきたい。

### 『ダンボールを用いた協同的な遊び』

H23.6～

東海第一幼稚園 5歳児 さくら3くみ  
(男児7名、女児9名 計16名)

#### 1) はじめに

ダンボールを使った遊びとして、このクラスの何人かは4歳児の時に自分の体より大きなダンボールに触れ、中に入ってごっこ遊びをしたり、長くつなげてあるダンボール壁の形を変え、道や部屋にし遊びを経験している。しかし保育者の手で加工されていないダンボール(ダンボールそのもの)という素材から自由に遊ぶ経験はまだ少なく、作りたい物、遊びたいこともそれぞれ違うであろうし、実際触れてみないと予想しきれない所がある。一人ひとりがダンボールを手にし、自由に遊びを進めていく中でのかわり合いやまとまりを見出していきたい。

#### 2) 実践

##### 《自由遊び》

大量のダンボールを保育室に置く。

- A. ダンボールをつなげて迷路作り。
- B. ダンボールを横に倒しトンネルのようにし、くぐる。
- C. 大きなダンボールの中に入る。
- D. 大きなダンボール壁で囲い、その中で赤ちゃんごっこをする。

#### 《遊びの発展》

- ★Aの子たちはどんどんダンボール片をつなげて道にしていく。その近くでBの子たちがトンネルくぐりをして遊んでいるが、次第に飽きてトンネルの中で話をしている。

迷路の途中にBが遊んでいるトンネルに向かってダンボール片を加えておく。



それに気づいた子が、「トンネルとつながりそう！」と喜び、ABで協力して巨大な迷路を作ろうと決め、『巨大迷路』を作り始める。



- ★Cの子どもたちは大きなダンボールの向きを変えながら中に入り楽しんでいるが、ダンボールがある向きになった時、一人の女兒が「ここにこれくらいの穴をあけてほしい。」と頼む。

女兒の気持ちを受け止め、思いに沿った形に穴をあける。



女兒が「窓みたいになった！みんなで服屋さん作らない？」と遊んでいた友だちに提案す

ると皆が賛成し、『服屋さん』を作り始める。

- ★Dの子どもたちは大きなダンボール壁で囲いをし、赤ちゃんごっこをして楽しむ。

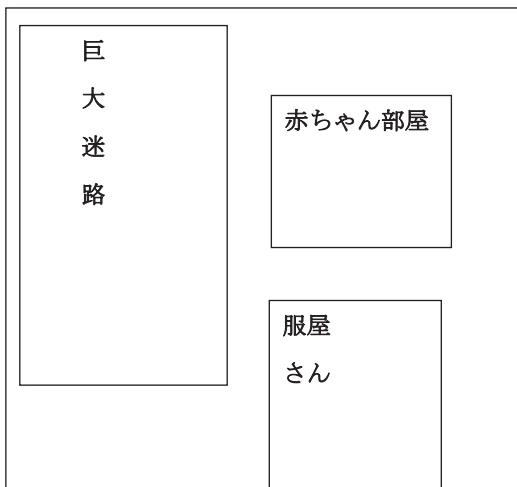
「ここ赤ちゃんの部屋みたいだね。」と寝ている子どもたちにダンボールの布団をかける。



「ここを本当の部屋みたいにしよう！」と一緒に遊んでいた子同士意見を合わせ『赤ちゃん部屋』を作り始める。

#### 【保育室】

##### 環境構成



#### 《仲間とのかかわりによる遊びの発展》

- ★『巨大迷路』を作る男児の中に数が限られているガムテープを一人で使う子たちがいる。

「みんなで使うよ」とガムテープを取り上げダンボール遊びへの意欲を断ち切ってしまうのではなく、他の遊び場にもガムテープを付けてあげてほしいと頼む。



『巨大迷路』からガムテープを持つ子たちが『赤ちゃん部屋』、『服屋さん』を作る手伝いに行く。「大工さん」と呼ばれるようになる。

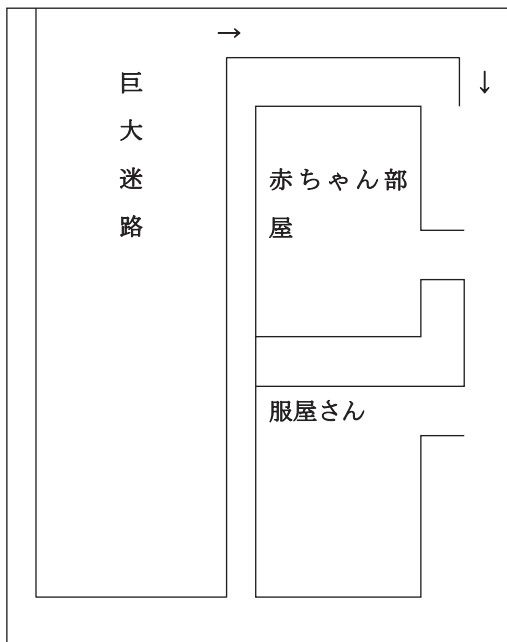




これをきっかけにガムテープを持っている子、そうでない子も遊び場を行き来するようになり、『巨大迷路』の遊びを抜け『赤ちゃん部屋』『服屋さん』に入る子どもでできて、男女が協力して遊ぶようになる。

- ★Cの『服屋さん』では店の看板、のれん、服など廃材を使って作るようになり、お店を開く準備を進めている。店の壁を切り開き、“出口”とドアを作る女兒がいる。
- ★Dの『赤ちゃん部屋』では廃材を使ってまごとして遊んでいる。部屋に看板を作り、入口のドアを作る女兒がいる。
- ★ABの『巨大迷路』ではダンボールをひたすらつなぎ合わせ道を作る男児たちが『赤ちゃん部屋』『服屋さん』の周りを囲むように迷路を進めていく。

#### 【保育室】 環境構成



次回の遊びが始まる前に『赤ちゃん部屋』『服屋さん』のドアを作りかけの迷路の方へ向けておく。



遊びが始まると『巨大迷路』を作る男児たちが「ここつながりそう！」とダンボール片で道を伸ばし「つなげていい!？」と尋ね『赤ちゃん部屋』と『服屋さん』に入っていく。



遊び場同士がつながったことを皆が喜び、迷路の中を歩いて遊び場を行き来し、場所を共有するようになる。

- ★男児が迷路を通して「このダンボール、冷蔵庫みたい!」と『赤ちゃん部屋』に届ける。その冷蔵庫を皆で喜び、『赤ちゃん部屋』がにぎやかになる。

遊び場を協力して作っていきこうという男児の皆に姿を紹介する。



『服屋さん』に「これお金にしよう!」と紙を持っていく、「ヒーローマント作って!」とお店にリクエストする姿が出てくる。遊びが終わった後、遊び場を見て男児が、「巨大迷路の中に赤ちゃん部屋と服屋さんがあって、これさくら3組の超!巨大迷路や!」という。すると皆も真似して「超巨大迷路」と呼びだす。



遊び場がつながったことにより、コーナーの隔たりがなくなり、クラス全体で一つの遊び場として協力して作るようになる。それを『さくら3くみ超巨大迷路』と呼ぶようになる。

- ★クラス皆で『さくら3くみ超巨大迷路』で遊ぶ。迷路を通り、遊び場を共有する。
  - ・赤ちゃん部屋で寝たり、赤ちゃんが迷路で

- ・迷子になったりと赤ちゃんごっこを楽しむ。
  - ・服屋さんでヒーローマントを買い戦いごっこをする。
  - ・服屋さんでベビー服を買ったり、迷路で散歩したりと家族ごっこを楽しむ。
- 仲間と大きな一つの空間で、協同的に遊びを発展させながら楽しんで遊ぶ。

### 3) 分析

遊びを進めていく中で、保育者の“遊びがこうなってほしい”という「計画性」に基づいて常に「方向性」考えていく。さくら3くみ超巨大迷路という課題を捉え、そこに向かって子どもたちの「自由性」を尊重しながら示していく。子どもたちはその「計画性と方向性」に導かれ、主体的にかかわりを少しずつ広げていく。そして「遊びの経過」を遊び以外の時間に自分の目で見たり、他の遊び場の様子を保育者から聞いたりすることで自分以外の遊び場にも興味を示していくことができる。経過を形として残しておくことで「次はこうしたい!」「ここで遊んでみたい!」と次回への意欲・関心を高めていくのだと感じた。

これまでの研究を振り返ると、協同的に遊びを発展していくうちにクラスの中で遊びが一つにまとまっている。一つのまとまった遊びの中に、たくさんの楽しみ(遊び場)があり、まとまった遊びに対し「これは僕たち、私たちだけの遊び」という「空間」に喜びを感じている。始めはそれぞれが自由に遊んでいたとしても、同じ仲間たちと同じ保育室の中で同じ時間を共にしていくうちに、一人ひとりかかわりを伸ばしていき時間をかけて相互していた関係が絡み合い、かかわりが一つになる。それが協同的な遊びが発展したテーマ(さくら2くみの森、さくら3くみ超巨大迷路)となって現れてきた。ということはこの「空間」が遊びを協同的へと導いている一つの要因となるのではないか。

そこで「空間」を変化させ今までと同様の研究をしてみたい。「空間」ということを遊ぶ仲間、素材に触れる時間、場所の広さと捉え、これらを変化させると遊びは自由から協同へと発展していくのか研究してみたい。

### 『ダンボールを用いた協同的遊び』

H23.8～

東海第一幼稚園 全園児

遊戯室

1) はじめに

形、大きさの違うダンボールを広い遊戯室に大量に置き、様々な年齢の子どもたちに自由に触れさせたい。遊戯室での他の遊びもたくさんある中で、ダンボールに触れる時間も触れる子どもたちも変わってくるであろう。広い遊戯室の中で子どもの「自由性」を大事にし「計画性と方向性」を探りながら遊びを進めていきたい。そして「遊びの経過」を示しながら次の遊びへの意欲・関心を高め、遊び場を共有し合うきっかけにしていきたい。

2) 実践

《自由遊び》

大量のダンボールを遊戯室に置く。

- A. ダンボールの中に入って、キャタピラー遊び
- B. ダンボールの中に入って、お風呂遊び
- C. ダンボール箱を並べトンネル遊び
- D. ダンボール壁を並べ道作り
- E. ダンボール壁で囲い家族ごっこ
- F. 他の遊びを楽しむ

《遊びの発展》

★Cでは箱をトンネルにして出入りを繰り返して遊んでいる。

トンネルの出口とDの道作りをする間にダンボール壁をおいておく。



「もっと道長くしよう!」とCとDが道を作り出し、ぶつかった所で「つなげよう!」と道が長くなったことを喜び、トンネルや道を通りながら一緒になって遊ぶ。

しばらくして別の子たちがC、Dの道で遊び始めると「もっとこうしよう!」と道が変化していったが、始めに遊んでいた子たちは別の遊びへと行ってしまふ。

- ★Eの家族ごっこをする中でダンボール箱を車に見立て外出する子がいる。

「パパにドライブ連れてってもらおうよ！」と声を掛け、他の遊び場を見に行くようにする。



皆が入れる大きなダンボールを探し出し皆で入って遊ぶ。ダンボールの車で他の遊び場を見て回りながら楽しむ。

A、B、Fのそれぞれ思い思いに遊びを楽しんでいる子の近くを車に乗って通る。道の所でとまる。



「やりたい！入れて！」とダンボールを車にして遊戯室の中を走ったり、道を通って回るなど刺激を受けながら遊ぶ。回りながら遊ぶうちに別の友だちや遊びに刺激を受けダンボール遊びを抜ける子もいる。

- ★次に遊び始める時に自分の使っていたダンボール壁や箱を他の子が使っていると別の遊びをする。

### 3) 分析

その日の遊びの時間の中で遊びの発展はあるものの、「遊びの経過」に自分とかかわりが少ない子が入ることで意欲が損なわれてしまうことがあった。これは「僕たち、私たちの遊び場」という遊ぶ仲間の中に別の子が入り、手を加えたことで遊び場に対する愛着が損なわれてしまったのであろうと考える。それは素材に触れる時間がクラスや学年によって違うことでどのダンボールを使うのか、どの遊び場を使うのか変わってくることも原因の一つであらう。

そして遊戯室という場所の広さが一番の難点であった。それぞれの場所で思い思いにダンボール遊びを展開させていく子どもたちであったが、援助をするポイントもそれぞれであり、発展させる場面を逃し遊び飽きてしまうといっ

たことが多くあった。遊戯室という広い場所では全体として遊びを発展させていくことは非常に難しく、遊びの「方向性」を探れないままであった。

すべての子が協同的に遊ぶことができるようにするという点で、遊ぶ仲間、素材に触れる時間、場所の広さといった「空間」は重要な要因であると考ええる。

### 4. 結果と考察

自由遊びから協同的遊びへと発展させていく上で重要となる、「自由性」、「計画性」、「方向性」、「遊びの経過」、「空間」という要因を分析した。「自由性」は遊びを進めていく上で基本となる要因であり、どの子も自ら主体的に遊びに取り組んでいくことで主体的に友だちへとかわることができ、遊びを楽しめるポイントとなる所であろう。「計画性」と「方向性」は隣り合わせにある。それぞれ遊びを楽しみ満足して終わるのではなく、それぞれの遊びがかかわりを持っていけないかという計画を考え、子どもたちの遊びの中で援助によって方向を示していくことが必要である。ただ計画は始めから見通しを持ちすぎると子どもたちの「自由性」と反してしまうことがあるため、子どもたちの「自由性」に沿いながら計画や方向を柔軟に変えていく援助でなくては行けない。そして遊びが進んでいく中で「もっと遊びたい！」と意欲を継続させていく援助として「遊びの経過」を把握させていくことが重要である。もちろん保育者が全体の遊びを捉えておくことは大前提であるが、子どもたちも自分以外の遊びを捉えることで、刺激を受け、つながりを求める子がでてくるかもしれない。皆の遊びを自分の目で知り、保育者や友だちから耳で聞き、自分の肌で遊びを体感したいと思うことが遊びの継続へとつながってくるのではないだろうか。最後に「空間」という要因があることで遊びがまとまり、気持ちや遊びが一体となる。遊ぶ仲間、素材に触れる時間、場所の広さといった「空間」的な要因があつてこそまとまりが生まれやすくなり、「僕たち私たちだけの遊び」として仲間意識が強く



なっていくであろう。

ただこの研究で見出した要因と言えど、対象となるのは子どもたちである。年齢ないし、クラスや学年といった子どもたちの実態はさまざまである。そして保育者の経営の仕方によって子ども一人ひとりの遊ぶ力や友だち関係も様々である。要因を満たしたからといって必ずしも自由遊びから協同的な遊びへと発展させていけるわけではないが、保育者の援助次第では、子どもたちの今後の人間関係における基盤となるような経験を与えることができるのである。子どもたちが主体的に友だちにかかわっていけるようこれからも援助を考えていきたい。

## 【参考文献】

事例で学ぶ保育内容＜領域＞人間関係

無藤隆・岩立京子・赤石元子・高濱裕子・西坂  
小百合・森下葉子・倉持清美 著